

# 自立した主権者 をめざして



Vol.16 対話の場に求められるもの

## KEYPOINT

- あなたにとって「対話」とはどのようなことですか？
- 立憲主義と聞いて思い浮かぶことは？

## SUMMARY

社会を変えるためには対話が必要だという話が各方面から聞こえてきます。しかし、ただ人が集まって話すだけでは何も変化は生まれません。対話と会話の違いは何でしょうか。そして、わたしたちは対話をするために、どんなことを意識すれば良いのでしょうか。



## その話し合いは何のためにやるの？

私たちは「対話とは何か」について考え続けています。「合意形成」「多様性」「人権」「コンソの形成」など、どんなテーマをあげても、最終的に「対話」が必要という結論になることが多く、それゆえに対話の重要性を強く感じています。立憲民主党政調会長の小川淳也氏は衆議院選挙や党の代表選挙において、「対話こそが政治の原点」「対話の中からしか新たな可能性はない」と言い切りました。「対話から生まれる可能性」は、自分たちの社会を変えようとする上で最も希望がもてる言葉ではないでしょうか。だから皆で集まろう、対話をしようと思いがちですが、ふと、「対話と会話」の違いについて考えました。人が集まって話すことは、対話も会話も変わらない。では、対話とは何なのでしょう。

対話と会話、それは「意味の共有」の有無に違いがあります。例えば地域での様々な課題に対し、多角的な視点から考えようと、性別や年齢、職業など、違う立場や肩書をもつ人が集まって、

あるテーマで話をするのがよくあります。そのような「話し合い」は、行政が主催するまちづくりの市民ワークショップや市民団体の活動などで多く見受けられますが、「話し合い」に参加すること自体は楽しく、また新たな発見などもあり、充実した時間を共有することが出来ます。しかし一方で、参加者の話は聞いただけで実際の行動には結局つながらず、「形ばかりの話し合い」になっていることも多いように感じます。これは同じ時間に同じ場所で「話し合う」という同じ「言葉」を使っているにもかかわらず、参加者がその話し合いを行う「意味」を共有していないところから生じてしまうのです。

## 対話をつくるのは参加者の意識

ひとには様々な価値観があり、見えている景色も違います。「話し合いに参加」しても結局は誰かに「任せて」しまう人、「予定された結論を出す」ことが目的になってしまう人、その場にいるだけで「参加している」と思い込んでいる人などがいることを理解し、進めていく必要があります。例えば、「護憲と改憲」という言葉を考えたとき、どのようなイメージを持っているかは各人の経験や立場によって大きく異なります。護憲と改憲という言葉は憲法9条ということだけでとらえる人、時代を作ろう、当事者性を持つという考え方が薄

く、自分は変わりたくないからこのままでという  
思いが強い人が護憲を支持するという人。憲法は  
大事であるが、時代とともにそれは変化する。何  
十年も前の憲法をそのままずっと使い続けるた  
ということがはたして良いのかということに適宜  
考え、必要に応じて変えていくということを改憲  
という人。これは実際に話してみないと  
わかりません。自分が思う言葉の背景にあるイメ  
ージと、相手の背景にあるイメージは、もしかす  
ると異なっているかもしれない。その違いを聴き  
合い、伝え合う作業が「対話」なのです。

自分の意見を伝える時にはその理由を伝え、相  
手の意見を聞くときには、相手がなぜそう思うの  
かという考えや背景を理解しようとする姿勢を  
持つことはやがて、他者の立場に立ってその人の  
苦難を想像し理解しようとする共感力につなが  
ります。他者の苦難を想像すると同時にお互いが  
それを「自分ごと」と捉えて、誰かの生きづらさ  
はその人の問題ではなく構造化・制度化された社  
会の問題であり、その社会で生きる自分は当然そ  
のことに関係を持っているという社会的想像力  
を育むこと。地域の課題を話し合いを行う「意味」  
とは、「自分には関係ない」と思っていたことを身  
近な問題として個々が認識し、話し合うことで解  
決に向けた行動を起こすことにあります。当然で  
すが、対話は1人ではつくることができないので  
す。

## コモンズの中で成長する対話

このような対話が行われるためには、対話を行  
う場(コモンズ)の在り方が重要になります。多様  
性を受け入れることは「自分と違う意見を受け入  
れる」ことになりますが、とても勇気がいることで  
す。これは自分の意見が否定されるかもしれない  
という心理的な不安から起こるものです。また自  
分を受け入れられたと感じて初めて人は安心をし  
ます。話し合いの内容を他人事と感じている人は、  
自分だけが入り込めないという疎外感を感じてい  
るかもしれません。テーマを私生活の中の出来事  
として置き換えられるような話し合いの進め方を  
意識し、参加者が何を言っても「安心・安全な場」  
を作るということが、「対話」を行う上で求められ  
るものなのです。

### 〈機関紙「日本再生」No.511の内容〉

2021/12/01 発行

立憲民主主義の政治文化と能動的変革のための新しい  
表現をつくりだそう●2-4 面/コラム/一灯照隅●4-6 面/  
総会報告●6-7 面/インタビュー/総選挙・千葉8区/本  
庄知史・衆院議員に聞く●8-10面/インタビュー/くじ引き  
民主主義?/吉田徹・同志社大学教授に聞く●10-12  
面/インタビュー/バイデン政権を評価する視点/三牧聖  
子・高崎経済大学准教授に聞く

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の  
連絡先までご連絡ください。

一緒に  
考えてほしいこと

- ・意識した「対話」を行ったことがありますか？
- ・あなたの周りにコモンズはありますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義」を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。